

“目的”の明確化・意識化

～すべての“活動”には意味がある～

私がまだ若かりし日の出来事です。私と同学年の学級担任をしていたA先生が、教室のベランダにフラワーポットを置いて、きれいな花を育てていました。私は、A先生が自分の趣味で花を育てているんだろうと単純に思っていました。するとある日の学年職員の会議の席で、学年主任の先生が、「みなさんはA先生がベランダで花を育てているのをご存じでしょうか。私はそれを見てA先生は、学年の指導目標である、『豊かな心を育てる』を実践していると感心しています。」と話されました。

これを聞いて私ははっとしました。学年主任の先生は、“教師の一見何気なく見える行動にも、すべて教育として意味があるのだ”ということを教えてくれたのだと思います。

本稿 No.5 で紹介した、交通事故を起こした生徒のいる学級担任に指導した、とある高校の校長先生の言葉、「あなたは教師だろう？教師としての専門性があるんじゃないのか？」と同じような意味を持つ言葉に感じます。つまり、あらゆる“活動”の“目的”を明確に意識して、その達成を目指して指導することが大事だということなのだと思います。

例えば、ルーティンのようにになっている毎年の行事でも、常に“目的”を意識することが大切です。

「なぜこの“活動”を行うのか」という問いに対して、「やらないよりやった方がいい」などという答えは、学校教育の中にあってはならないと思います。

学校という教育の場で行うすべての“活動”には意味（＝“目的”）があり、それを行うことによって子供たちの学びが保障されなければなりません。本

稿 No.4 の「部活動」、No.6 の「清掃活動」、No.13 の「あいさつ」などは、すべてその考えに沿って書きました。

私は校長時代、その考え方を踏まえてあることを調べてみました。それは自校で行っているあらゆる教育“活動”の種類と、その“目的”を全体像としてとらえてみることでした。

取り入れた方法はマトリクス方式です。やり方は簡単で、縦横の網目状の表を作成し、左列に本校で行っているすべての“活動”（例えば、授業から始まり、領域活動、学校行事等々）を記入します。また、一番上の行には、その“活動”の“目的”（＝育てたい力。例えば、自主性、協調性、規範意識、対話能力、意欲等々）を記入します。そうした上で、例えば『学園祭』という“活動”に対して、対応する“目的”のマスに「◎」（一番育てたい力）、「○」（次に育てたい力）を付けていきました。

全ての“活動”に印を付けた結果、重要なことに気付きました。それは、ある“目的”にはたくさんの「◎」や「○」が付いているのに、ある“目的”にはほとんど付いていなかったのです。非常に偏りがありました。つまり、いつくもの“活動”が同じ“目的”達成のために行われている一方、ある“目的”のための“活動”がとても少ないということがわかったのです。

どの“活動”においても要項が作られると思いますが、それには必ず“目的”が書かれています。担当者がそれを意識していても教職員全員、ましてや児童生徒たちにどこまでそれが認識されているでしょうか。ましてやその“活動”が、学校教育全体の中でどのような位置にあり、どのくらいの比重を占めているのかまでは、あまり認識されていないので

はないでしょうか。そのため、全体として偏りが生じてしまうのかもしれません。

このマトリクスを作成してみて、そのことが一目瞭然にわかりました。そこで対策を立てることができました。“目的”がたくさん重複している“活動”は縮小したり廃止したりして、別の“活動”に振り替える。逆に、ある“目的”を達成したいのに、その“目的”を持つ“活動”が少なすぎる場合には、拡充する。そのような計画の練り直しは、教育“活動”をより効果的にしていくことになります。

教育活動全体を俯瞰して客観的に示すことができれば、職員や児童生徒に対しても“理解と納得”が得られやすくなります。これは学校教育のスリム化、子供たちの負担の軽減や、教員の働き方改革にもつながる事だと思います。

次に大切な点は、今行われている“活動”の“目的”が、どの程度達成できたのかをしっかりと評価することです。それをしっかりと行い、改善できれば、今後もより有効な“活動”が実施されることになり、子供たちの学びがさらに深まり、同時に学校教育もスリム化できるということです。

評価とは、“目的”に沿って「何をしたら、どうなったのか」ということを、できるだけ具体的に、できたら数値で表して明確にすることです。“目的”が達成できたとしたら、「どういうやり方をしたらできたのか」を明確にすること。逆に、あまり達成できなかったとしたら、「何が原因だったのか」をできるだけ具体的に分析し、次回はそこを改善すればいいことになります。評価をあいまいにしたままだと、毎年、同じ課題が生じて、学校教育の貴重な時間が無駄になってしまいかねません。

あいまいな評価とは、例えば社会科見学の場合、

「無事に全員帰ってきてよかった」とか、「集合時間に遅れた人がいた」とかの反省だけで終始してしまうような評価のことです。当初の“目的”であった「働く人の様子を理解する」「規律ある集団行動がとれるよう態度の育成を図る」ということが達成できたのかどうかをしっかりと評価することが大事なのです。そのためには教師も児童生徒もその“活動”の“目的”をしっかりと頭に入れて、その達成のために何をしたらよいのか、意識して取り組む必要があります。

子供たちの貴重な時間を使って行う“活動”です。必ずその“目的”の達成を目指さなければなりません。もちろん一つの“活動”だけで“目的”が達成できるわけではないので、そこは年間通して、とらえる必要があります。言い換えると、それはグランドデザインの評価と言ってもいいでしょう。

これを1年間しっかりと行えば、子供たちの成長が目に見えてわかるはずです。各校では、もう一度、教育“活動”の総点検をしていただき、子供たちが真に伸びる、またそれを教師も子供たちも実感できるような、楽しい学校づくりをしていただけたら嬉しく思います。

(市川三郷町教育長 渡 井 渡)

